

第二十八回 齋藤茂吉短歌文学賞

橋本 喜典 『行きて帰る』

短歌研究社

選考委員

委員長 三枝昂之

委員 小池 光

永田和宏

馬場あき子

【贈呈式】

平成二十九年五月十四日(日)

(五十音順)

橋本 喜典 『行きて帰る』 (自選)

勘三郎も藤十郎も大鵬もパン屋一生のわが友も逝く

ニッケル貨拾ひてくれて手の内に拭ひてわれの手の平に載す

重き袋は妻に持たせて葱一本突き出て軽きを提げてゆく春

早蕨を清らに濡らし夜の明けをわが精神の川は流るる

忘れさせて呉れる歲月 忘れさせて呉れぬ歲月 忘れてはならぬ歲月

さねさしさがみの若菜なな草のいのちいただく日本人われ

蒼波のわだつみの声に杭を打つ「だまれ」はかつての軍人言葉

初蝶や吾が三十の袖袂 石田波郷

初蝶は而立の袖にまつはりて八十八の袂にも来む

ふり返る歌もまたよし引き寄する力もて詠むいまの心に

あこがれは行きて帰るの心なり笈はかへる言霊もまた

人生の年輪

三枝 昂之

橋本さんの世界は時代や年齢が強い困難を含蓄ある人生歌として作品化したところに特色がある。

蒼波のわだつみの声に杭打つ「だまれ」はかつての軍人言葉

自身の青春を踏まえながら今の日本のあり方に危惧を示した世界には詩歌ならではの静かさと深さがある。

戴きし書簡の文字の小さくてその懇ろをなやみつ
つ読む

ちちははを或いは夫はた妻を介護してくるしき歌
詠む人々

人生は壊れやすく苦しみも多い。だから愛おしい。そんな声が歌からは聞こえてくる。掛け替えのない歌の味わいである。

齋藤茂吉短歌文学賞にまた豊かな成果が加わったことを心から喜びたい。

いぶし銀の輝き

小池 光

橋本喜典氏は昭和三年の生まれである。終戦のとき十七歳である。

敗戦後十七歳のわれの読みし『哲学以前』のほろほろが出づ

という歌がある。『哲学以前』は哲学者出隆の著書である。敗戦後の混沌とした社会をハイティーンとして生きて、さまざまな難関を一步一步突破して成長していったありさまがよく浮かぶのである。

それから窪田空穂、章一郎に師事して短歌の道に入った。その作風は派手なところはどこにもなく、抑制されて質朴なものであるけれど、年輪を重ねるにつけ、簡素にして重厚、いぶし銀の輝きを帯びるに至った。

郵便をポストに落としようすこし歩かうと小さき決断をする

この「小さき決断」は重い。一語一句の重みと輝きが全編に漲る歌集である。

作歌姿勢への信頼感

永田 和宏

一昨年「短歌研究賞」に続いて、橋本喜典氏の受賞に二度かわることになった。そんな場に、重ねて立ち会わせていただけることはうれしいことである。

私はまだ橋本喜典さんにお会いしたことがない。なにも拘わらず、氏の性格、生き方に關しては、私にはそれなりの了解がある。すべて歌からくるものである。それを一言や二言でまとめるなどではできないことはないし、それは不遜というものだろう。

表札の古りしを洗ふ「まひる野会」ついでに「橋本喜典」も洗ふ

長く続けてきた「まひる野」の発行所を次世代に引き継いだ折の歌である。こんなユーモアのなかに歌人橋本喜典の骨格が明らかに見て取れる。そこに「実直」という言葉を重ねてもいいが、繰り返し戦争を詠い、教え子やその死を詠い続ける、その作歌姿勢は、そのまま歌人としての橋本喜典への信頼感につながるものである。

窮極の感懐

馬場 あき子

どの歌にも戦中、戦後を生き耐えた内省と慨嘆がこもっているのが心を打つ。

大津波に吞まれし子らと撃沈されし対馬丸の子ら
と悲は異なるや

ここでは三・一一の津波に吞まれた児童たちの悲に重ねて、一九四四年八月、魚雷攻撃を受けて沈んだ対馬丸の疎開児童八百名の地獄を重ねて哀悼している。著者にしてはじめて詠まれたであろう一首だ。

著者の日常詠には、理想に遠い現実への嘆きと、多くの病いと闘いつつ生きた八十八年の生の重さがある。本来、明るく快活な著者の洒脱さと人生の究極をみせた二首をあげよう。

死支度致せ致せと一茶の句いやだいやだとさくら
におもふ

八十八年董の花の一輪に如かずと知りぬ帰りなむ
いざ

受賞のことば

橋本 喜典

私は戦後（太平洋戦争後）歌をつくりはじめたごく初期のころ、齋藤茂吉の「歌作りを人生出世の道と思うな」ということばに出遭って、強く心に刻まれた。ここでいう「出世」を、私は「歌を作ることで有名になるうなどと思うな」という意味に理解し、とても大切なこととして、時おり思いだしては今に及んでいる。

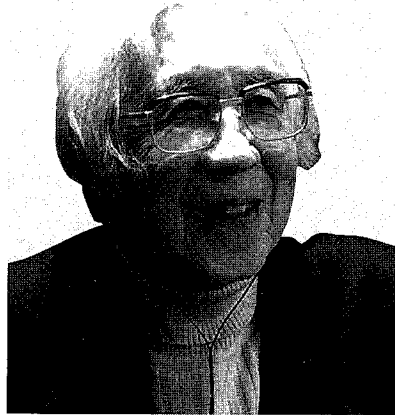
右と同じくまだ初心のころ齋藤茂吉編『長塚節研究』（上下二巻）を読んだ。この上巻には茂吉の「長塚節の歌」という論文が載っているが、そのなかで、

霧島は馬の蹄にたててゆく埃のなかに遠ざきにけり

という一首について、「この結びの『けり』で悠久感をあらはし得たやうにおもふ」とあるのを読んで思わず唸ってしまった。このとき私は日本のことばである文語のもつ深さを初めて教えられたのである。

初心時代の右の二点、茂吉先生にいま、お礼を申し上げます。

最後になりましたが、私の歌集をご支持くださった方々、授賞をお決めくださった選考委員の先生方に厚くお礼を申し上げます。



第28回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

橋本 喜典 (はしもと よしのり)

歌人。

1928年(昭和3年)東京都生まれ 88歳。

早稲田大学文学部卒業。早稲田中・高等学校に40年間勤務。

1948年(昭和23年)まひる野会に入会、窪田章一郎に師事。

2001年(平成13年)師の没後より「まひる野」発行所を担当。

元「まひる野」運営・編集委員長。

【主な著作等】

歌集：昭和30年『冬の旅』、昭和59年『地上の間』、

平成6年『無冠』、平成15年『一己』、平成20年『悲母像』、

平成24年『な忘れそ』、平成28年『行きて帰る』

著書：平成10年『歌人窪田章一郎－生活と歌』

平成12年『短歌憧憬－評論とエッセイ』

平成28年『続短歌憧憬－評論とエッセイ』、『名歌で学ぶ文語文法』

受賞歴：平成7年成22回日本歌人クラブ賞

平成16年第4回短歌四季大賞

平成21年第24回詩歌文学館賞、第16回短歌新聞社賞

平成27年第51回短歌研究賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆
- 第二回 本林勝夫
- 第三回 塚本邦雄
- 第四回 前登志夫
- 第五回 斎藤芳史
- 第六回 近藤美
- 第七回 小暮政次
- 第八回 馬場あき子
- 第九回 吉田 漱
- 第十回 佐佐木幸綱
- 第十一回 伊藤 博
- 第十二回 森岡貞香
- 第十三回 竹山 広
- 第十四回 藤岡武雄
- 第十五回 清水房雄
- 第十六回 小池 光
- 第十七回 三枝昂之
- 第十八回 花山多佳子
- 第十九回 永田和宏
- 第二十回 河野裕子
- 第二十一回 伊藤一彦
- 第二十二回 品田悦一
- 第二十三回 篠 弘
- 第二十四回 秋葉 四郎
- 第二十五回 栗木 京子
- 第二十六回 小島ゆかり
- 第二十七回 柏崎 驍二

- 『親和力』 砂子屋書房
- 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 『黄金律』 花曜社
- 『鳥獸蟲魚』 小澤書店
- 『秋天瑠璃』 不識書院
- 『希求』 砂子屋書房
- 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 『飛種』 短歌研究社
- 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社
- 『吞牛』 本阿弥書店
- 『萬葉集釋注』 集英社
- 『夏至』 砂子屋書房
- 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 『滴滴集』 短歌研究社
- 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 『後の日々』 角川書店
- 『母系』 青磁社
- 『月の夜声』 本阿弥書店
- 『齋藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房
- 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店
- 『茂吉幻の歌集』 『萬軍』 ―戦争と齋藤茂吉― 岩波書店
- 『水仙の草』 砂子屋書房
- 『泥と青葉』 青磁社
- 『北窓集』 短歌研究社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇一八五七〇 山形市松波二丁目八一

山形県観光文化スポーツ部県民文化スポーツ課内

TEL・〇三三六三〇一一九〇三